

	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
音順	傷寒論・金匱要略条文	読み および解説・その他
きー1	桔梗湯	<p>桔梗 (辛微温) 1g・甘草 (甘平) 2g 上の2味を水 120ml を以って煮て 40ml となし、滓を去り 2回に分けて温服する。 すると膿や血の混じった痰を吐く。</p>
<p>弁少陰病脈証併治第十一第 31 条 (傷寒論)</p>		
<p>「少陰病 2、3 日、咽痛する者は甘草湯を与う可し。瘥えざれば桔梗湯を与う。」</p>		
<p>解説 少陰病で 2、3 日して咽が痛む者は、甘草湯を与えてやるべきである。もし甘草湯を服して治らなければ桔梗湯を与えてやればよい。</p>		
<p>少陰病で下痢のない初期 (少陰病に罹って 2、3 日経って) に咽痛が出る場合は、熱邪が少陰経脈にあるため、また病が軽く浅くまだ潰瘍になっていないもので、咽痛、咳また痛みなどの時の頓服薬として、甘草湯を用いて清熱解毒、緩急止痛すればよい。この場合の咽頭は、軽い発赤腫脹、舌紅がみられる。甘草湯を服用しても咽候腫痛が治らないものには桔梗湯を用いて熱結を散じ、喉痺を開いてやればよい。</p>		
<p>甘草湯証 咽痛と咳を目標に用いる。また痛みなどの時の頓服薬としても用いる。頭痛、発熱などの表熱があるときは用いない。</p>		
<p>桔梗湯証 咽痛、咳、痰などを目標に用いる。多くの場合、ゾクゾクと悪寒する。しかし体温計での熱は無い。また咽候がいがらっぽく、口が渇くことがあっても水は欲しがらない。</p>		
<p>甘草は、味は甘で性は寒で、甘で緩急止痛し、寒で除熱解毒する。桔梗は開痺散結して、咽候を利す。</p>		
<p>「方劑決定のコツ」の注釈</p>		
<p>甘草は、粘膜などの炎症による痛みによく、桔梗は、鬱熱があつてそのために痛みを發するものによいので、桔梗湯の痛みは、甘草湯の痛みより少し深く強い。</p>		
<p>甘草湯は、肺痿の虚に用い、桔梗湯は、肺癰の実に用いるのである。</p>		
<p>参考 喉痺とは、咽候腫痛病の総称をいい、多くは発病および病気の進行は急ではなく、咽候の腫脹発赤疼痛も軽く、軽度の嚥下困難を現わし、或いは声が低く出にくくなる。外感内傷どちらによっても起こり、外感風熱によるものが多く、内傷は陰虚によるものが多い。</p>		
<p>手少陰心経は、心中に起こり小腸に通じ、支脈は咽頭を挟み、足少陰腎経は足より上行し、腎より横隔膜を貫いて、肺に入り舌の根元を挟む。</p>		
<p>桔梗湯証 新古方薬囊によれば「咽が痛む者、咽痛みで咳の出る者、咽がいがらっぽい者、此の場合熱ある者もあり、熱が無い者もあり、熱少しあり悪寒して身体だるく咽が痛む者あり、咳が多く出で痰が出る者、本湯の場合には口中がはしゃぐことはあれども湯があつて水を欲すると言ふ事は無きものなり。」と記されている。</p>		
<p>肺痿肺癰咳嗽上気病脈証併治第七第 12 条 (金匱要略)</p>		
<p>「咳して胸滿、振寒して脈は数咽乾して渴せず、時に濁唾腥臭を出だし久久、米粥の如き膿を吐する者、肺癰と為す、桔梗湯之を主る。桔梗湯の方亦血痺を治す。」</p>		
<p>数、濁唾腥臭を出だし久久、主る、亦</p>		
<p>解説 咳が出て、胸が一杯になって、苦しく寒気がしてガタガタと震えて、脈は熱を表わす数である。そして咽がカラカラになるけれども水は飲みたくない。時々生臭い濁ったつばを吐き出す。長くこのような状態が続くと、飯粒位の膿のかたまりが痰の中に混じって出るようなものは肺癰である。桔梗湯が主治する。桔梗湯は、また血痺の病にも奏効する。</p>		
<p>外邪が肺を犯し、肺熱のために胸滿して苦しく、内熱 (肺熱) が腠理を開くために、悪寒して脈は熱脈の数を示す。咽乾は痰の粘着によるもので、水で口を注ぐのみで、飲む必要はない。すなわち内の熱であれば渴するはずであるので、この場合の熱は裏熱ではなく、咽候に熱が集まって起こる症状である。そして時々生臭い濁った唾を吐き出す。長くこのような状態が続くと、飯粒位の膿の塊が痰の中に混じって出るようなものは肺癰である。この場合、咽候に熱と寒が入って閉ざされて、肺の熱が外発することが出来ず熱がこもって肺癰を起こすのである。咽の熱を取り除いてやれば、肺の熱は取れるのである。従つて咽に寒熱が停滞して通りが悪くなって咳をする場合には、桔梗湯が主治する。桔梗湯は、また血痺の病にも奏効するのである。</p>		
<p>桔梗湯の桔梗は辛微温で痰の流動を促し、排膿せしめ、甘草が痰の緊縮を緩和する。故に甘草は灸としない。</p>		
<p>肺痿肺癰咳嗽上気病脈証併治第七第 19 条 (金匱要略)</p>		
<p>「外台 桔梗白散、咳して、胸滿、振寒して脈数、咽乾きて渴せず、時に濁唾腥臭を出だし、久久なれば米粥の如き膿を吐する者を治す。これを肺癰となす。」</p>		
<p>解説 外台の桔梗白散は、咳が出だすと胸が一杯になって苦しく、悪寒がしてブルブル震え、脈が数となる。咽は乾く様な感じはあるが口渇は無く、そして時々濁った痰や、臭気のある痰を吐く、このような病状が久しい時には、米粒のような膿の塊の混じった痰を吐くようになる。これは肺癰である。胸苦しく、咳、悪寒、脈が数などの証があつて、臭いのある痰を吐く程度であれば桔梗湯で主治するが、重症になって米粥のような膿痰が出るようになれば桔梗白散が主治すると考えられる。</p>		
<p>「方劑決定のコツ」の注釈</p>		
<p>肺痿肺癰咳嗽上気病脈証併治第七第 19 条 (金匱要略) の桔梗白散の条文と、肺痿肺癰咳嗽上気病脈証併治第七第 12 条 (金匱要略) の桔梗湯の条文と同じであるが、病理が異なる。</p>		
<p>桔梗白散は、桔梗湯 (桔梗・甘草) の甘草の代わりに貝母・巴豆を加えたもので、桔梗湯の場合は、表虚があつて陽氣を發することが出来ずに、陽邪が少陰の経に伝わり咽痛を起こしたものであるのに対し、桔梗白散の場合は、胸腹内の異常な停滞物により穀道が遮られて下に通じることが出来ずに上に向かい、胸滿短氣を起こすもので、停滞物が下れば肺熱が去るのである。</p>		
<p>辛微温の桔梗と、辛平の貝母で肺中の鬱滞を散じ、辛温の劇物たる巴豆で癰塊を破壊して吐出せしめる。</p>		
<p>邪熱が胸にこもって、水と結ばれて結胸を起こした場合は、小陷胸湯証であるが、結せざれば桔梗白散証となる。</p>		
<p>桔梗湯の悪寒は、傷寒の悪寒とは異なり、内熱のために腠理が開くことによる。</p>		
<p>桔梗湯の用いる範囲は広いが、その源は少陰の経にあつて上記のような症状を發する。</p>		
<p>肺癰とは、咽候に熱と寒が入って閉ざされて肺の熱が外発することが出来ず、肺中に熱がこもり、そのために咳が多く出て、その時に胸中が痛み、膿の如き濃い痰を吐き、身体に熱があるものをいう。</p>		